

反乱の機関紙

〔クロンシュタット・イズヴエスチャ〕紙よりの拔萃)
まず第一に、(凱に以下の号の)若干の大見出しがある。
すべての権力をソヴェトへ、党へではなく！
ソヴェトの権力は、共産主義者たちの束縛の場から、労働者たちを解放するであらう。
レーニンは、「共産主義、それは電化である以上、ソヴェトの権力だ」といった。しかし民衆は、ボリシェヴィキ共産主義、それは、銃殺以上の人民委員たちの絶対主義であることを確認した。
憲法制定会議ではなく、ソヴェトが、労働者の城壁である。
自由ソヴェトの権力とともにある赤いクロンシュタット万歳！
トロツキーの最初の発砲は、共産主義者たちの遭難信号である。

〔第一号、一九二一年三月三日〕

クロンシュタットの要塞と市の住民へ

が積極的な精力的な機関であるように、その再選出に就いて最も公正な原則を設定するために、水兵と、守備隊と、労働者のすべての代表は、三月二日、教育会館に集まった。この集会は、新しい選挙の原則を作製し、ついで積極的で平和的な仕事、ソヴェト制度の再編成の仕事を開始することとなった。

さて、権力の代表たちの威嚇的な演説につづく弾圧を怖れるのは当然のことなので、集会は、臨時革命委員会を設置し、それに市と要塞の行政に関する全権を与えることを決定した。

臨時委員会は、その本拠を戦艦ベトロパヴロフスク号内においた。

同志と市民よ！臨時委員会は、特に流血を避けることに心がけている。委員会は、市内、要塞内、砦内での革命の秩序を維持するために全努力を用いた。

同志と市民よ！諸君の仕事を止めるな。労働者よ、諸君の機械を離れるな。水兵と兵士よ、諸君の部署を放棄するな。すべての職員、すべての機関は、仕事を続けなくてはならない。

臨時革命委員会は、すべての労働者組織、船舶その他のすべての同業組合、海と陸とのすべての部隊、ならびにすべての市民それぞれに、委員会を援助するよう要請する。

その使命は、われわれとの友愛的な協力の中で、新しいソヴェトの公正な適切な選挙のために必要な諸条件を

同志と市民よ、わが国は難局に直面している。飢えと寒さと経済的混乱が、われわれを怖るべき窮境に追い込んだ、すでに三年もの歳月がある。国を支配する共産党は、大衆から離れ、全般的崩壊の状態から大衆を脱出させる力がないことを暴露した。党は、最近ベトログラードとモスクワで起きた、そして党が労働者大衆の信頼を失ったことをはつきりと示す、諸紛争にいかなる考慮も払わなかった。党はまた、労働者たちから表明された要求にもいかなる考慮も払わなかった。党は、それらすべてを反革命の陰謀と見なしている。党は、たいへんな思い違いをしている。

それらの紛争、それらの要求、それは、民衆全体の、働くものすべての声である。すべての労働者、水兵、赤軍兵士は、働くものの共同努力のみが、共同の意志のみが、国にパンを木を石炭を与えることができ、民衆に衣服と腹物を与えることができ、現に突き当たっている袋小路から共和国を脱出させることができることを、今ははつきりと理解しているのである。

すべての労働者の、赤軍兵士の、水兵の、この意志は、三月一日火曜日の、わが市の大集会ではっきりと表明された。集会は、第一、第二艦隊乗組員の決議案を、満場一致で可決した。

可決された決定の一つは、ソヴェトの再選出を即時に行なうこと、であった。

労働者のソヴェトへの代表が効果的であり、ソヴェト

確保することである。

したがって、同志よ、秩序正しくあれ、平静であれ、冷静であれ！

すべてを、全労働者の幸福のための公正な社会主義の事業のために！

クロンシュタット、一九二一年三月二日。

署名。ペトリチエンコ、臨時革命委員会議長、トウーキン、書記。

モスクワからの無線電報

われわれは、モスクワの《ロスタ》通信社から発せられ、ベトロパヴロフスクの無線電信局によって傍受された、次の無線電報を公表する。

白衛派の陰謀と闘おう！

元將軍コズロフスキーと戦艦ベトロパヴロフスクの反乱は、以前のほかの多くの陰謀がそうであったように、対ソ協商のスパイたちによって組織された。それは、「ベトログラードからの知らせによると、クロンシュタットの反乱について、ボリシェヴィキ軍事当局は、クロンシュタットを孤立させ、クロンシュタットの兵士と水兵がベトログラードに近づくことを妨げるための措置をとった。クロンシュタットへの補給は、新しい命令があるまで禁止された」というヘルシンキ発の電報を、コズロフスキーの反乱の二週間も前に発表した、フランス

のブルジョア新聞『朝』^{ル・マティン}を読んでも認められる。

クロンシュタットの暴動がパリによって指導されていること、フランスのスパイがそこに介入していることは明らかである。いつもながらのくり返される歴史。パリから指導される、革命的社会主義者たちが、ソヴェト政府への反乱を企てた。そしてその準備が終わるや否や、真の指導者、ツァーの將軍が姿を見せた。革命的社會主義者たちの援助をえて権力を取り戻そうと企てたコルチャックの話は、何度もうり返される。ツァーの將軍たちから革命的社會主義者たちまでも含む、労働者の敵すべては飢えと寒さをあてにしようとしている。もちろん、將軍たちと革命的社會主義者たちのこの反乱は、速やかに鎮圧されよう。そして、コズロフスキー將軍とその共犯者たちは、コルチャックの運命をたどるであろう。

しかし、対ソ協商のスパイの罠が、クロンシュタットのみに張られたのではないことは、疑いないところである。労働者と赤軍兵士よ、この罠を粉碎せよ！ 陰謀者と挑発者の仮面を剥げ！ 冷静さと自制と警戒が諸君には必要である。一時的な、しかし確かに辛い、食糧その他の難局から脱出する唯一の手段は、十分に協調した激しい労働であること、労働者たちの呪われた敵の最大の喜びのために貧窮を増すことにしかならない、無分別な暴行ではないことを、忘れるな。

われわれは、共產主義者の飛行機によって、空からク

ロンシュタットに撒かれた、布告文をお知らせする。市民は、この挑発的な中傷に軽蔑しか感じないであろう。「だまされている、クロンシュタットの人々に。」

ごろつきどもがあなた方をどこに導いたか、今あなた方は知っていますか。それをお知らせしましょう！ ツァーの元將軍たちの貪欲な牙は、革命的社會主義者とメンシェヴィキの背後に、すでに現われています。ペトリチェンコやその他トウーキンらは皆、ツァーの將軍コズロフスキー、ボルクセル、コストロミチノフ、シルマノフスキーの各大尉、そのほかの明白な白衛派によって、操り人形として動かされているのです。あなた方はだまされています！ あなた方は、民主主義のために闘っている、と聞かれています。二日が経った今、あなた方は、実際には、民主主義のためではなく、ツァーの將軍たちのために闘っていることを、悟っています！

〔第二号、一九二二年三月四日〕

クロンシュタット市の住民へ

市民よ！ クロンシュタットは、自由のための激しい闘いを始めている。クロンシュタットを奪い、われわれを飢えと寒さと経済的崩壊に導いた権力を、またわれわれに強制するための、共產主義者たちの攻撃が、絶えず予期される。

最後まで、われわれは、力一杯、頑強に、獲得した自

由を守るであろう。われわれは、クロンシュタット奪取の企てを阻止するであろう。そして、共產主義者たちが武力をもってそうしようとするなら、われわれは、当然の抵抗をして反撃するであろう。

臨時革命委員会は、住民に対して、銃声を聞いた場合に動揺しないことを要請する。

落着きと冷静さが、われわれに勝利をもたらすであろう。

臨時革命委員会

注意

臨時革命委員会は、逮捕された共產主義者たちが暴行を受けているという噂を強く否定するものである。逮捕された共產主義者たちは、完全に安全である。

しかも、逮捕された多くの共產主義者たちのうち、一部は釈放された。共産党の代表が、逮捕の根拠について審査することを任務とする委員会に参加するであろう。共產主義者の同志たち、イリーン、カバーノフ、ペルヴィン、革命委員会に問い合わせ、戦艦ペトロパヴロフスク上に拘禁者たちを訪ねることを許可された。それらの同志たちは、ここに署名をして、以上を確認している。

署名。イリーン、カバーノフ、ペルヴィン。原本と相違ないことを証明する、署名、N・アルヒーポフ、革命委員会委員。——書記として、署名、P・ボグダーノ

フ。

〔第三号、一九二二年三月五日〕

勝利が死か

代表者会議。——昨三月四日、午後五時、守備隊クラブにおいて、軍部隊と労働組合の代表者会議が開かれた。この会議は、ほかのメンバーを選出して臨時革命委員会を補充するために、そして進行中の出来事の報告を聞くために、招集された。

二百二十人の、大半が職場から直接やってきた代表者が、会議に出席した。

水兵ペトリチェンコが主宰し、仕事が過重な臨時革命委員会は、少なくとも十人の新しいメンバーによって補充されなくてはならない、と述べた。

申しでた二十人の候補者のうち、集会は、圧倒的な多数で、ヴェルシーニン、ベルベルキン、クボロフ、オソソフ、ヴァルク、ロマンenko、バヴロフ、バイコフ、パトリチェフ、キルガストの同志たちを選出した。

新しいメンバーたちは、執行部の席についた。

ついで、臨時革命委員会議長、ペトリチェンコは、選出からこの日までの委員会の活動について、詳細な報告を提出した。

同志ペトリチェンコは、要塞の全守備隊と各艦は、もしもの時には闘う準備ができていたことを強調した。彼

は、市の全勤労大衆、労働者、水兵、赤軍兵士を鼓舞している、目覚ましい熱意を確認した。

熱狂的な拍手喝采が、新しく選出されたものと議長長の報告を迎えた。

集会はついで、日常の業務に移った。

市と守備隊は、食糧と燃料を十分に備えていることが明らかにされた。

労働者の武装の問題も検討された。

すべての労働者は例外なく武装され、市内の守備に当たることが決定された。というのも、すべての水兵たちと兵士たちは、戦闘部隊の中で部署につくことを望んだからである。この決定は、「勝利か死か！」という叫びの中で、熱狂的な賛同をかきたてた。

ついで、三日間のうちに、すべての労働組合の管理委員会と労働組合評議會を再選出すること、が決定された。この評議會は、指導的労働者機関となり、臨時革命委員会と常時の接触を保つこととなった。

それから、ペトログラードから、ストレルナから、ペテロフから、オラニエンバウムから、数多の危険を賭して逃げてきた、同志である水兵たちが、情勢の報告をした。

彼らは、それらすべての地域の住民と労働者は、共産主義者たちによって、クロンシュタットで起きていることについて、全く無知のままにおかれている、と確認した。いたるところで、白衛軍と将軍たちがクロンシュタ

ットで軍事行動を行なっているという噂が広まっていた。

この知らせは、一同をどっと爆笑させた。

さらに集会を陽気にさせたもの、それは、共産主義者の飛行機によってクロンシュタットに撒かれた、一種の《宣言》の朗読であった。

「おお、その通りだ！」と人々は叫んだ。「ここには一人だけ将軍がいるよ。バルチック艦隊の人民委員クズミンさ！でも、彼は逮捕されているぜ！」

集会は、熱狂の表明と祈願によって終わり、勝利か死かという固い満場一致の決意を示した。

〔第四号、一九二一年三月六日〕

論 説

クロンシュタットの水兵と労働者のタコのできた手は、共産主義者たちの手から指導権を取り上げ、舵を奪った。

ソヴェト権力という船は、注意深い確実な方法でペテログラードの方に導かれてゆき、そこから、タコのできた手の中にあるその権力は、不幸なロシアに広がってゆかねばならないであろう。

しかし、同志たちよ、警戒せよ！

諸君の用心を倍加せよ。なぜなら航路には暗礁が散らばっているからである。軽率な舵の取り方一つで、諸君

の船は、諸君にとってあれほど貴重な任務、社会的建設という任務とともに、岩礁に坐礁することとなる。

同志たちよ、舵の周りを近くから監視せよ。敵はすでにそれに近づこうとしている。一たび間違えば、彼らが諸君から舵を取り上げるであろう。ソヴェトという船は、ツァー派の従僕ども、ブルジョアジーの召使どもの勝ち誇った笑いの下で、沈んでゆくこともありえよう。同志たちよ、諸君はその時、共産主義者たちの独裁に對する、偉大な平和的な勝利を喜ぶ。しかし、諸君の敵もまた、それを喜ぶのだ。

この喜びの理由は、諸君と彼らとは、反対である。

諸君は、ソヴェトの真の権力を再建するという熱烈な欲求、自由な労働をする労働者と、自分の土地で自分の労働の産物を自由に処分しうる権利を享受する農民とを見たいという、高貴な希望に活気づけられている。彼ら、彼らは、ツァーリズムの笞刑と将軍たちの特権を再建することを夢みている。

諸君の関心は違っている。彼らは、諸君の同伴者ではない。

諸君は、創造的な仕事、平和的な建設に着手するために、共産主義者たちの権力を取り除くことを必要としていた。彼ら、彼らは、労働者と農民とをふたたび奴隷とするために、その権力を倒そうとしている。

諸君は自由を求めている。彼ら、彼らは、彼らの流儀で諸君を束縛しようとしている。

油断するな！ 舵に近づく小羊の皮をかぶった狼を放置するな。

打電されたアッピール

すべての……へ、すべての……へ、すべての……へ。

同志である労働者、赤軍兵士、水兵よ！

こちらにはクロンシュタット、われわれは、諸君自身、飢えた諸君の妻子、諸君が、共産主義者たちの独裁のくびきの下でいかに苦しんでいるか知っている。

われわれは、共産主義者のソヴェトを投げ捨てた。数日以内に、われわれの臨時革命委員会は、新しいソヴェトの選挙を行なうであろう。自由に選出されたそれは、全勤労大衆と守備隊の意志をよく反映するであろう、《共産主義の》一握りの狂人どもの意志ではなく。

われわれの根拠は正当である。われわれは、党のではなく、ソヴェトの権力に賛成する。われわれは、勤労大衆の代表の自由な選挙に賛成する。共産党によって、変造され、独占され、操作されているソヴェトは、われわれの必要とわれわれの要求に、いつも耳を貸さなかった。われわれが受けた唯一の回答は、人殺しの弾丸であった。

現在、労働者たちの忍耐は限界に達しているのに、施し物の力を借りて諸君の口はつぐませられようとしている。ジノヴィエフの命令で、通行止めはペテログラード地方で廃止され、そしてモスクワは、外国で食糧と必需

品を購入するために、一千万のルーブル金貨を用意している。しかし、われわれは、ベトログラードのプロレタリアートが施し物で買われるままにはなっていないことを知っている。共産主義者たちの頭上を越えて、革命的なクロンシュタットは、諸君に手を差し伸べ、諸君に友愛的な援助を送る。

同志たちよ！ 人々は諸君をだますばかりではなく、さらに破廉恥にも真実を曲げている。この上なく下劣な虚偽にまで身を落としている。同志たちよ、そうされたままではな！

クロンシュタットでは、権力は、革命的な、水兵、兵士、労働者の手中にのみある。モスクワの嘘をつくラジオが諸君に信じさせようとしているように、《ゴズロフスキー》とやらに指導される反革命者たち》の手中にはない。

ぐずぐずするな、同志たちよ！ われわれと団結せよ！ われわれと接触を保て！ 諸君の無党派の代表たちがクロンシュタットに来ることを許可するよう、要求せよ。彼らのみが、諸君に真実を伝え、《フィンランドのパン》と対ソ協定の陰謀についての、卑しむべき中傷の仮面を剥ぎうるであろう。

都市と田園の革命的プロレタリアート万歳！
自由に出されたソヴェトの権力万歳！

ある手紙

〔第五号、一九二二年三月七日〕

論 説

《陸軍元帥》トロツキーは、共産主義人民委員たちの絶対主義に対して叛逆している、自由な、革命的な、クロンシュタット全体をおどしている。

共産党独裁の恥すべき束縛を投げ捨てた労働者たちは、この新しい類のトレイポフによって、軍事的瓦解の怖れがある。彼は、クロンシュタットの平和的な住民を砲撃すると約束した。彼は、《弾丸を惜しむな！》という別の命令もくり返している。彼は、革命的な、水兵、労働者、赤軍兵士に対して、多量のそれを用いなくてはなるまい。

ある代表団についての交渉

臨時革命委員会は、ベトログラードから次の電報を受けとった。

「何が問題なのかを知るために、無党派のものと党員の中から選んだ数人のソヴェトの代表を、ベトログラードからクロンシュタットへ派遣しうるかどうか、無線電報によってベトログラードに通知せよ」

臨時革命委員会は、即座に無線電報で回答した。ベトログラード・ソヴェトへの電報——「何が問題なのかを知るために、無党派のものと党員の中から選んだ

下部の共産主義者の同志たちよ！ 諸君の周りを注視せよ。諸君は、われわれが怖るべき沼地にはまり込んでいることを見るであろう。われわれはそこへ、一握りの《共産主義者》官僚によって導かれた。彼らは、共産主義者という仮面の下に、われわれの共和国の中に、ぬくぬくとした居場所をととのえたのである。

共産主義者として、私は諸君に、諸君を兄弟殺しに追いやる、偽の《共産主義者たち》を取り除くように、と嘆願する。彼らのおかげで、われわれ、何一つ責任のない下部の共産主義者たち、われわれが、わが同志である無党派の労働者や農民の非難を蒙っている。

私は、現在の状況に胆をつぶしている。
われわれの兄弟たちの血が、あの《共産主義者官僚たち》の利益のために流されることが、ありうるのだろうか？

同志たちよ、良識に立ち戻れ！ 諸君を挑発し、諸君を殺戮に追いやる、あの《共産主義者》官僚たちのなすままとなっているな。彼らを追っばえ！ 真の共産主義者は、その思想を強制してはならない。そうではなく、同じ戦列の中で、全労働大衆とともに歩まなくてはならない。

ロイカリ、ロシア共産党（ボリ）党員

数人のソヴェトの代表を、ベトログラードからクロンシュタットに派遣しうるかどうか」を尋ねた、ベトログラード・ソヴェトの電報を受けとって、われわれは諸君に、われわれは諸君の無党派のものの独立を信用できない、と通知する。

われわれは、われわれの代表団立会いの下で、工場と赤軍部隊と水兵の、無党派の代表を選出することを提案する。クロンシュタットの代表のベトログラードへの、ベトログラードの代表のクロンシュタットへの派遣の日時を指示する回答を、三月六日、十八時までになされた。それまでに答えることが不可能な場合、われわれは、諸君が日時と遅延の理由を示すことを要求する。交通の手段が、クロンシュタットの代表団に保証されねばならないであろう。

臨時革命委員会

われわれは復讐をしないであろう

共産主義者独裁による勤労大衆の抑圧は、民衆の間に完全に自然な、憤激と怨恨とを生んだ。その事態の結果として、共産主義者たちに近い何人かの人々は、ボイコットされるか、追い払われた。そうしたことはもはや起きてはなるまい。われわれは、復讐を求めているのではない。われわれは、われわれ労働者の利益を擁護しているのである。冷静に行動し、サボタージューか中傷活動かによって、労働者の権力と権利の再建を妨げるもののみを、除

去することが必要である。

砦は連帯する

われわれ、《クラスノアルメエーツ》の砦の赤軍兵士は、身も心も革命委員会とともにある。われわれは、最後の瞬間まで、委員会を、労働者と農民を、守るのである。

飛行機によって撒かれた共産主義者たちの声明の嘘を、誰も信じないように。われわれのところ、ここには、将軍たちも貴族たちもない。クロンシュタットは、常に労働者と農民の町であった。クロンシュタットは、そうありつづけるであらう。

共産主義者たちは、われわれがスパイに動かされている、といっている。それは、恥知らずの嘘だ。われわれは、革命によって獲得された自由をいつも守ってきた。われわれは常にそれを守るであらう。もしそれを納得したいのなら、われわれの下に代表団を派遣するように。将軍たちについていうなら、彼らは共産主義者たちに仕えている。現在、国の運命が危機に瀕している時、権力を手中にした、革命委員会に最高指揮権を委託したわれわれは、守備隊全体に、すべての労働者に、われわれは、勤労大衆の自由のために死ぬ覚悟であることを宣言する。共産主義者のくびきと、その三年間のテロルから解放されたわれわれは、ただの一步ですら後退することよりも、死を選ぶ。

クラスノアルメエーツ砦分遣隊

〔第六号、一九二二年三月八日〕

最初の「公式声明」

午後六時四十五分、セストロレスクとリツシー・ノスにある共産主義者たちの砲台が、初めて、クロンシュタットの諸砦に対して発砲した。

各砦は、挑戦に応じ、速やかに諸砲台を沈黙させた。ついで、クラスナヤ・ゴルカが発砲した。それは、戦艦セバストーポリの当然の返礼を受けた。

間において砲撃はつづいている。わが方では、二人の赤軍兵士が負傷し、病院に収容された。

いかなる物質損害もなし。

クロンシュタット、一九二二年三月七日。

最初の発砲

彼らは、クロンシュタットを砲撃し始めた。よろしい！ 覚悟の上だ！ われわれの力を見せてやろう！ 彼らは行動を急いだ。なぜかといえば、共産主義者たちのあらゆる嘘にもかかわらず、ロシアの労働者たちは、三年間の隷属のち、革命的なクロンシュタットによって着手された、解放の仕事の偉大さを理解し始めているからだ。

死刑執行人たちは不安に衝かれている。彼らの怖るべき逸脱の犠牲者、ソヴェト・ロシアは、彼らの牢獄から脱出した。そして、同時に、彼らは、労働者大衆への彼らの支配を放棄することを強いられた。共産主義者たちの政府は、遭難信号を発した。自由クロンシュタットの八日間の存在が、彼らの無力を証明している。

さらに付け加えていえば、われわれの栄光ある戦艦とわれわれの革命的な砦の当然の返礼が、《権力をソヴェトへ、党へではなく》という旗を翻している革命的なクロンシュタットとの闘いに応ずることを強いられた、ソヴェトの海賊たちの船を沈めるであらう。

世界よ知れ！

すべての……へ、すべての……へ、すべての……へ。大砲の第一撃が放たれたばかりである。労働者たちの血で汚された、《陸軍元帥》トロツキーは、真のソヴェト権力を再建するために共産主義者たちの独裁に対して起ち上がった、革命的なクロンシュタットを、初めて砲撃した。

血の一滴すら流されることなく、われわれ、クロンシュタットの赤軍兵士、水兵、労働者、われわれは共産主義者たちのくびきから解放された。われわれは、われわれの中にいる共産主義者たちの命をとらなかつた。彼らは今、大砲の威嚇の下に、われわれにふたたび彼らの権力を強制している。

いかなる流血も望まないわれわれは、クロンシュタットがソヴェトの権力のために闘っていることを理解するよう、ベトログラードのプロレタリアートの無党派の代表たちをここに派遣することを要請した。しかし、共産主義者たちは、ベトログラードの労働者たちにわれわれの要請を隠し、発砲した。それは、労働者と農民の政府と称するものの、勤労者大衆の要求に対するいつもながらの返答であった。

全世界の労働者たちが、われわれ、ソヴェト権力の擁護者たちが社会革命の獲得物を監視していることを、知

ることを望む。

われわれは勝利を得るか、労働者大衆の正当な立場のために闘いつつ、クロンシュタットの崩壊の中で非業の死をとげるであらう。

全世界の労働者たちがわれわれの判事となるであらう。無実の人々の血が、権力に酔い痴れてたけり狂う気違ひども、共産主義者たちの頭上にそそがれるであらう。

ソヴェトの権力万歳！

臨時革命委員会

解放クロンシュタットより世界の労働者たちへ

今日は、世界的な祭日、労働婦人の日である。われわれ、クロンシュタットの民衆は、勤労大衆の敵、共産主義者たちによって放たれた、大砲の大音響と砲弾の炸裂

の最中で、全世界の労働者たちにわれわれの友愛的な挨拶を送る、自由な、革命的な、赤いクロンシュタットの挨拶。

われわれは、諸君が、あらゆる暴力と抑圧の形からの諸君の自由な解放を実現されることを願う。

自由な革命的労働者万歳！

世界社会革命万歳！

臨時革命委員会

クロンシュタットは平穏である

昨日、三月七日、労働者の敵、共産主義者たちは、クロンシュタットに対して発砲した。

住民は、勇敢に砲撃を迎えた。労働者たちは、見事な情熱をもって、急いで武器を取った！市の勤労大衆は臨時革命委員会と完全に一致して暮らしていることが明らかにされた。

戦端が開かれたにもかかわらず、委員会は、戒厳令を布告することは無益だ、と判断した。実際、誰を怖れねばならないのであろう。確かに、われわれの赤軍兵士でも、水兵でも、労働者でも、あるいは知識人でもない！反対にベトログラードでは、戒厳令が布告されたために、人々は七時までしか、外出することを許されていない。このことから、べてん師たちが彼ら自身の勤労大衆を怖れねばならないことが理解される。

自発的な反乱にまで達した農民たちの自発的な抗議に対して、その生活の条件からストライキに訴えることを強いられた労働者たちの要求に対して、彼らは、ツァーの將軍たちが羨むであろう、一斉射撃と残忍さで答えた。

労働の解放の赤旗をかかげた最初のもの、労働者たちのロシアは、共産主義者支配の最大の虚栄のために、殉教者たちの血の中で見捨てられた。共産主義者たちは、この血の海の中に、プロレタリア革命の偉大な美しいあらゆる約束と可能性とを溺死させた。

共産党が、そうであるふりをしていのように、労働者たちの擁護者ではないことは、次第にはっきりしてきたし、今では明らかである。労働者階級の利益は、共産党には無関係である。権力を獲得したのち、党は、それを失わないことという唯一の配慮しか払っていない。したがって、中傷、詐欺、暴行、虐殺、叛逆者の家族への復讐といった、すべての手段はよいことだ、と党は考えているのである。

しかし、殉教者である労働者たちの忍耐は限界に達した。故国のあちこちには、抑圧と暴行に対して闘う、反乱の火の手が上がっている。労働者のストライキが多発している。

ポリシェヴィキのスパイたちが眼を光らせている。不可避的な第三次革命を妨げ圧殺するための、あらゆる措

われわれが闘っている目的

十月革命をなしとげながら、労働者階級は、彼らの解放を獲得することを希望していた。しかし、その結果生まれたものは、人間個人のよりいっそう著しい隷属であった。

警察君主制の権力は、民衆を自由にしておくかわりに、苛酷さではツァーの憲兵の方法をはるかに越える、チェカーの牢獄の恐怖を民衆に対して用意している横領者たち、共産主義者たちの手に渡った。

闘争と苦しみとの長い年月の果てに、ソヴェト・ロシアの労働者は、チェカーの《コサック騎兵》の無遠慮な命令、銃剣の突き、弾丸の音しか獲得しなかった。実際、共産主義権力は、労働者たちの栄光ある象徴、鎌と槌とを、別の象徴、銃剣と鉄格子に、新しい官僚、人民委員と共産主義官僚に平穏な気苦勞のない生活を保証することを許すものに、代えたのである。

しかし、最も卑しむべきもの、最も罪あるもの、それは、共産主義者たちによって樹立された精神的な隷属である。彼らは、労働者たちの、思想をも、精神生活をも独占し、彼らの公式にしたがってのみ考えることを各自に強いた。

国家統制化された労働組合の力を借りて、彼らは、労働者を機械に結びつけ、労働を楽しいものとするかわりに、労働を新しい隷属に変えた。

置がとられている。

それにもかかわらず、第三次革命は到来した。それは、勤労大衆自身によって実現された。共産主義の將軍たちは、起ち上がったのは、彼らが革命の理想を裏切ったと確信している民衆であることを、よく知っている。身の危険を恐れ、労働者たちの怒りをのがれようとしても、何一つ隠しおせないと知っている共産主義者たちは、彼らの《コサック騎兵》の力を借りて、牢獄、死刑執行その他の残酷行為をもって、叛逆者たちをおびやかそうとしている。共産主義者独裁のくびきの下で、生すら死より悪いものとなった。

反乱中の勤労大衆は、共産主義者たちに対する、再建された奴隸体制に対する闘いの中で、道の半ばでとどまりえないことを理解した。最後まで進まねばならない。共産主義者たちは、譲歩を与えるかのようなふりをしていいる。彼らは、ベトログラード地方で通行止めを取り除いた。彼らは、外国での物品購入のために一千万のルーブル金貨を提供した。しかし、それにだまされないように。この餌のかげに隠されているのは、主人の、独裁者の、平穏が戻ってきたら、彼らの譲歩に高価な償いをさせようとする主人の、鉄拳である。

否だ、道の半ばでとどまるな！勝利か死が必要である。

左翼の反革命にとつてと同様に右翼の反革命の恐怖の的である、赤色クロンシュタットは、その模範を示して

いる。

革命の新しい偉大な推進力を実現したのは、ここである。最近三年間の専制に対し、君主制のくびきの三世紀さへ蒼ざめさせる共産主義独裁の抑圧に対し、反乱の旗をかかげたのは、ここである。

労働者の最後の鎖を断ち切るであろう、社会主義的建設への新しい広大な道を労働者に開くであろう、第三次革命の礎石がおかれたのは、ここ、クロンシュタットにある。

この新しい革命は、東洋と西洋の勤労大衆を奮起させるであろう。なぜなら、機械的な、政府中心的な、共産主義的《建設》とは反対の、新しい社会主義的建設の模範を示すであろうからである。われわれの国境の向こう側の勤労大衆は、その時、これまでわれわれの国で労働者と農民の名においてなされたすべてのものは、社会主義ではないことを、事実によって納得するであろう。

その方向への第一歩は、一つの発砲もなく、一滴の血も流さることなく、踏みだされた。労働者たちは、血を必要としない。彼らは、正当な防衛の場合以外、流血を避けた。共産主義者たちのあらゆる不快な行動にもかかわらず、われわれは、彼らの偽りの悪意ある煽動によって革命の事業を損うことを妨げるために、彼らを社会生活から隔離させるだけにとどめるよう、かなりの自制をするであろう。

労働者と農民は、敢然と前進する。彼らは、憲法制定

会議とそのブルジョア体制を乗り越え、共産党独裁とそのチェーカーと、労働者たちの首の周りの結び目を締め直し、締め殺すとおどす、その国家資本主義を乗り越えてゆく。生まれたばかりの変化は、勤労者大衆に、逆に、自由に選挙された、一党のいかなる暴力的圧力もなく機能するソヴェトを、確保する可能性を提供している。この変化はまた、彼らに、国家統制化された組合を、労働者と農民と知的労働者の自由な提携組織に再編成することを許すであろう。

共産主義者独裁の警察的機能は、遂に粉碎された。

〔第七号、一九二二年三月九日〕

トロツキーよ、聞け

共産主義者たちは、彼らの無線電信を通じて、人民委員たちの横領と専断に対して真のソヴェト権力を擁護している、第三次革命の鼓吹者たちについて、夥しい下卑た言辞を浴びせた。

われわれはそれを、決してクロンシュタットの住民に隠さなかった。つねにわれわれは、われわれの『イズヴェスチャ』紙の中で、それらの中傷による攻撃を公表してきた。

われわれは、怖れるべきものは何一つない。市民たちは、いかにして反乱が起き、誰によってそれがなされたかを知っている。

労働者も赤軍兵士も、守備隊の中には、将軍たちも白衛軍もないことを知っている。

一方、臨時革命委員会は、共産主義者たちによって満員の牢獄の中に拘禁された人質たち、労働者たち、水兵たちとその家族の釈放、ならびに政治的拘禁者の釈放を要求する電報を、ベトログラードに送った。

われわれの第二の電報は、われわれのところで何が起きたのかを現場で見、ベトログラードの勤労大衆に真実を伝えよう、無党派の代表をクロンシュタットに來させることを要求した。

ところがだ！ 共産主義者たち、彼らは何をしたか。彼らはその電報を、労働者と赤軍兵士に隠した。

われわれの側に移ってきた、《陸軍元帥》トロツキーの軍隊のいくつかの部隊は、われわれにベトログラードの新聞を届けてきた。それらの新聞には、われわれの電報についてただの一語もない！

しかしながら、イカサマの札で勝負することに慣れている、あのべてん師どもが、民衆に対して秘密を持つ必要はない、外交上の秘密すら必要ない、と叫んでいたのは、そう昔のことではない！

トロツキーよ、聞け！ お前が民衆の裁きを首尾よくのがれうるかぎり、お前は無実の人々を束にして銃殺しうるであろう。しかし、真実を銃殺することは不可能である。真実は、結局自分の道を切り開くであろう。その時、お前とお前の《コサック騎兵たち》、お前たちは、

決算することを強いられるであろう。

労働組合の再編成

共産主義者たちの独裁の下で、労働組合とその管理委員会の任務は、最小限に縮減された。

《社会主義》ロシアにおける革命的組合運動の四年間に、われわれの組合は、階級的組織であるいかなる可能性も持たなかった。

それは、いささかも組合の誤ちのためではなかった。そうであったのは、事実、《共産主義的な》、中央集権的な方法で大衆を教育しようとした、指導党の政策の結果なのであった。

結局、労働組合の仕事は、あちらの、あるいはこちらの組合の、組合員の数を明らかにし、それから各組合員の特質、党との関係での彼の立場、等々に注意をそそぐことを目的とする、絶対に無益な記録と通信連絡とに切り詰められた。

協同組合的な経済活動や組合の加盟労働者の文化的教育についていえば、その方向では何一つ計画されなかった。それもごく自然のことである。というのも、組合に広汎な独立した活動の権利が与えられたなら、共産主義者たちによって企てられた建設の中央集権的な性格は、宿命的に崩壊せざるをえなかったであろうし、それは、人民委員と《政治部門》の無益さの証明に到達するものであったからである。大衆を組合から引き離したのは、

それらの欠陥であり、組合は、最後には、勤労階級の真に組合的なあらゆる活動を妨げる、憲兵の細胞と変わったのである。一たび共産主義者独裁が倒されれば、組合の役割は根本的に変化しなければならないであろう。組合と一たび再選されたその管理委員会は、国の経済的、文化的な刷新のために、大衆の教育という偉大な緊急の任務を果たさねばならないであろう。それらは、新しい息吹きで、それらの活動を活発化させねばならないであろう。それらは、民衆の利益を真に現わすものとなるべきであろう。

ソヴェト共和国は、その行為が、刷新された組合の力を借りて勤労階級によって行なわれる時にしか、強力なものではありえないであろう。

したがって、労働者の同志たちよ、仕事にとりかかろう！ あらゆる支配から自由な、新しい組合を築こう。そこにこそ、われわれの力がある。

〔第九号、一九二一年三月十一日〕

労働者と農民の同志たちへ

クロンシュタットは、労働者と農民の解放のために、共産主義者たちの憎むべき権力に対して英雄的な闘いを開始した。

現に起きているすべては、共産主義者たち自身によって、三年來つづいて、彼らの血の破壊の行動によつ

の中に沈められようとしていた。

そして今や、トロツキー、このロシアの悪霊は、われわれに対してわれわれの兄弟たちを差し向けている。何百という彼らの屍が、要塞の周りの水上をすでに覆っている。四日來、われわれは戦闘に没頭し、大砲は轟き、兄弟の血が流れている。四日來、クロンシュタットの英雄たちは、あらゆる敵の攻撃を勝利のうちに撃退した。あのはいたかトロツキーは、われわれの英雄的な町を見下している。しかし、クロンシュタットは頑張りぬいている。われわれは皆、降伏するよりはむしろ死ぬことを覚悟している。

われわれの敵は、《クルサンティ》や特別共産主義者部隊や、だまされたり背後の機関銃でおどしたりして遠くから連れてきた部隊とともに作戦活動をしている。労働者の同志たちよ！ クロンシュタットは、諸君のために、飢えた人々のために、ぼろをまとい家のない人々のために、闘っている。

ポリシエヴィキたちが権力の座にとどまっている限り、人々はよりよい生活を経験することはないであろう。

諸君は、それらすべてに耐えている。

何の名においてか。ただ共産主義者たちが享樂しつつ暮らすために、人民委員たちがふとるためにのみか。諸君はまだ彼らを信頼できるのか。

ペトログラード・ソヴェトに、政府が各種の物品を購

て、準備された。田舎からわれわれの下に届いている手紙は、共産主義者たちについての、苦情と呪いにと満ちている。休暇から帰ってきたわれわれの同志たちは、怒りと憤激を掻き立てて、国中で、ポリシエヴィキたちによって犯された残虐行為を物語った。もちろん、われわれ自身、われわれも、われわれの周りで起きたことすべてを、見、聞き、感じた。絶大な悲痛な苦悩の嵐のような叫びが、広大なロシアの田園と都市からわれわれの下に達した。その叫びは、われわれの心を憤激に駆り立て、われわれの腕に武器を取らせた。

われわれは、過去への復帰を望んではない。われわれは、ブルジョアジーの召使でも、対ソ協商の雇われ兵でもない。われわれは、何らかの唯一の党の荒れ狂う専制的な権威ではなく、全労働者たちの権力に与するものである。

クロンシュタットで軍事行動をしているのは、コルチャックでも、デニキンでも、ユーデニッチでもない。クロンシュタットは、労働者たちの手中にある。クロンシュタットの、ただの水兵、兵士、労働者の良識と自覚が、われわれを袋小路から脱出させる、言葉と道とを遂に見出した。

初め、われわれは、平和的な方法ですべてを解決しようとした。しかし、共産主義者たちは譲歩しようとしなかった。ニコライ二世（後の皇帝）以上に、彼らは権力にしがみつき、彼らが独裁者として支配するなら、国中は血

入するため何百万ものリール金貨を提供したと知らせながら、ジノヴィエフは、各労働者が五十ルーブルずつもらうことになることを計算した。労働者の同志たちよ、見よ、ポリシエヴィキの一味が諸君を買おうとする、一人当たりの価格がそれだ。

農民の同志たちよ！ ポリシエヴィキ権力がだまし、最も裸にしたのは諸君だ。何世紀にもわたってそれを夢みていたのち、諸君が地主たちから奪った土地はどこにあるのか。土地は、共産主義者たちの手中にあるか、ソフホーズ（農場）によって耕作されている。諸君についていうなら、諸君にはそれを眺め、舌なめずりすることしか残されていない。

諸君から取り上げるすべては諸君から奪われた。諸君は、強奪に、完全な破壊に、身を委ねている。諸君は、ポリシエヴィキへの隷属によって、精根を枯らした。諸君は、飢えさせられながら、口に固い封印をされながら、この上なく汚れきった貧窮の中におかれながら、諸君の新しい主人の意志に従順であることを強いられている。

同志たちよ！ クロンシュタットの仲間たちは、何千万の労働者と農民とが自分たちのアッピールに応えるであろうと希望しつつ、反乱の旗をかかげた。

クロンシュタットに訪れたばかりの曙光が、全ロシアに輝く太陽へと変わることが必要である。

クロンシュタットの決起が、全ロシアを、第一にペト

ログラードを、蘇らせることが必要である。
われわれの敵は、牢獄を労働者たちで満した。しかし、数多くの誠実な大胆な人々がまだ自由にいる。同志たちよ、共産主義者たちの絶対主義に対する闘争のために立ち上がれ！

〔第一〇号、一九二一年三月十二日〕

われわれの将軍たち

共産主義者たちは、白衛軍の将軍たちと将校たちと一人の司祭が、臨時革命委員会のメンバーの中にいる、とほめかしている。

それらの嘘にきつぱりと結着をつけるために、われわれは、委員会は次の十四人のメンバーからなることを、彼らに知らせることにする。

- 1 ベトリチェンコ、ペトロバヴロフスク号乗組の第一記録係。
- 2 ヤコヴェンコ、クロンシュタット地区の電話交換手。
- 3 オソーソフ、セバストーポリ号の機関兵。
- 4 アルヒーポフ、一等機関兵。
- 5 ペルベルキン、セバストーポリ号の機関兵。
- 6 パトルーチェフ、ペトロバヴロフスク号の機関兵曹。
- 7 クーポロフ、第一軍医補佐。

- 8 ヴェルシーニン、セバストーポリ号の水兵。
- 9 トウーキン、電気工。
- 10 ロマネンコ、軍艦修理工場の守衛。
- 11 オレシン、第三技術学校の職員。
- 12 ヴァルク、大工。
- 13 バヴロフ、機雷工場の労働者。
- 14 バイコフ、荷馬車の御者。
- 15 キルガスト、信号手。

〔第二号、一九二一年三月十四日〕

郷に入っては郷に従え

労働者たちが彼らの無視されていた権利のために闘っていた時は、レーニンが偽善者ではない、真実をいうだろう、と当てることができた。

というのも、労働者と農民は、彼らの考えの中では、一方でのレーニンと、他方でのトロツキーとジノヴィエフを、分けていたからである。

人々は、ジノヴィエフ、あるいはトロツキーの言葉を信じなかった。しかしレーニンについては、彼への信頼はまだ失われてはいなかった。

しかし……

三月八日、ロシア共産党第十回大会が始まった。レーニンはそこで、反乱中のクロンシュタットについてのあらゆる嘘をくり返した。彼は、運動のスローガンは、

《商業の自由》である、と述べた。彼は、確かに、「運動はソヴェトのためのものである、だがポリシエヴィキの独裁に反対するものである」と付け加えた。しかし、そこに「白軍の将軍たちとプチ・ブルジョア・アナキスト分子」が加担している、ということを忘れなかった。

そうして、卑劣な言葉を口にしたが、レーニンは彼自身どうしてよいかわからなくなった。彼は、運動の根本は、ソヴェトの権力のための、党の独裁に対する闘いである、という告白をうっかり口にした。しかし、どぎまぎした彼は、付け加えていった。

「これは、別種の反革命である。それは、極端に危険である。われわれの政策にもたらそうとする修正が、ちょっと見たところ、いかに取るに足らぬものに見えるとはいえ」

彼が狼狽するのも当然であった。革命的クロンシュタットによってもたらされた打撃は、深刻であった。党の指導者たちは、彼の独裁の終わりが近づいたことを感じた。

レーニンの大きな混乱は、彼のクロンシュタットについての演説全体を通じてうかがわれる。《危険》という言葉が、そこでは絶えず蒸し返される。

たとえば、彼は、原文をあげれば次のようにいっている。

「このプチ・ブルジョアの危険にけりをつける必要がある。それはわれわれにとってきわめて危険である。な

ぜなら、プロレタリアートを統一させるかわりに、分裂させるからである。われわれには、最大限の統一が必要である」

確かに、共産主義者たちの指導者は、戦慄すること、《最大限の統一》を訴えること、を強いられた。なぜなら、共産主義者たちの独裁と党それ自身が、重大な破壊を示したからである。

一般的にいうと、レーニンには真実をいうことが可能であったろうか？

最近、組合についての共産主義者の討論会で、彼はいつた。

「すべては、私を死ぬほど退屈させる。私はうんざりしている。私の病気はともかく、すべてを放りだし、どこへでも逃げだせたら、私は幸福だろう！」

しかし、彼の仲間たちが彼が逃げるのを許さない。彼は、彼らの囚人である。彼は、彼らのように中傷しなければならない。そして、他方、すべての党の政策は、クロンシュタットの行動によって妨げられている。なぜなら、クロンシュタットは、《商業の自由》ではなく、真のソヴェトの権力を要求しているからである。

〔第一三号、一九二一年三月十五日〕

レーニン・トロツキー商会

レーニン・トロツキー商会は、なかなかよく活躍した。

権力の座にある共産党の犯罪的な絶対主義政策は、ロシアを貧困と破壊の淵に導いた。それがすめば、党が身を退くべき時であろう。だが悲しかな！労働者たちによって流された涙と血は、まだ十分ではないらしい。

共産主義者たちによって嘲弄され踏みつけにされた働く民衆の権利のために、クロンシュタットによって大胆に着手された歴史的闘争のその時に当たって、あの墓泥棒の団はその《第十回党大会》を開くことを決定した。一味はそこで、よりいっその悪意と成功とをもつて、彼らの兄弟殺しの仕事をつづける手段をたくらんだ。

彼らの厚かましきは完璧なものである。穏やかなやり方で、彼らは《商業上の譲歩》について語る。

レーニンは、ごく簡潔にこういった。

「われわれは、譲歩の原則を実現し始めている。この企ての成功はわれわれのせいではない。しかし、われわれはわれわれにできることをしなくてはならない。」そして、ついで彼は、ポリシェヴィキはソヴェト・ロシアを厄介な困惑の中においた、と告白する。「なぜなら、われわれがある範囲で経済的に他の諸国に追いつかねばならないとすれば、われわれは外国の技術にすることがなしに、国を再建することはできないからである。状況は、機械のみならず、われわれのところに多量にある石炭をも、外国から買うことをわれわれに強いている。われわれはさらに、日常の消費物資や農業経済にとっての

必需品を持つために、将来においても、新しい犠牲を払わねばならないであろう」

では、その名において、労働者を国の工場の奴隷に変え、勤労農民をソフホーズの農奴に変えた、あの名高い経済的達成はどこにあるのか。

そんなものは何もない。農業について語りながら、レーニンは、共産主義者たちが（彼の表現によれば）《経済的機能主義》をつづけてゆけば、よりいっその《安楽》を約束できる、といった。

「もしわれわれがいつか、あちこちで、大農業経済と大工業とを再建するのに成功するとしても、それは、引き替えのものを何一つ与えることなくしに、すべての生産者たちに新しい犠牲を強いながらでしか、なかるう」と彼はつづけていった。

そうしたものが、ポリシェヴィキの指導者が、人民委員たちの絶対主義に従順に束縛されようとする人々すべてに期待させる、《安楽》である。

彼は、いかにももっともである。あの農民（レニ）は、第八回ソヴェト大会においてこういった。

「すべてはたいへんうまくいっている。ただ、土地がわれわれのものなら、パンは諸君のものだ。水がわれわれのものなら、魚は諸君のものだ。森がわれわれのものなら、木は諸君のものだ」

それらのこと以外、労働者は心配の要はない、とか。レーニンは、「小企業者に若干の恩恵を与えること、

こまれて暮らしている。

住宅は、維持に気を配られなかったもので、荒れ果てている。暖房は、調子が狂っている。屋根は、浮き上がり、水が浸みこみ始めている。壁は、崩れている。導管は、半ば潰れている。便所は、物の用に立っていない。その中味がアパートの中に流れこんでいる。それで市民たちは、彼らの必要を満たすのに、中庭か隣の家にゆくことを強いられいている。階段は、燈火なしのままである。手垢で汚れきつてもいる。中庭は、糞壺や塵箱や排水溝や掃溜が修理もされず空にもされないもので、汚物で満ちている。決して修理されない歩道は、不潔で滑りやすい。道を歩くには危険がある。

住宅を手に入れるには、住宅を扱う当局によい《コネ》を持つことが必要で、それがなければ、住宅のことを夢みてはならない。ただ恵まれた人のみが好都合なアパートを持つのである。

食糧となると、もっとずっと悪い。無責任な無知な役人たちが、何千トンという産物を失われるままに放置している。配られたジャガイモは、いつも凍っている。肉は、春と夏には、いつもいたんでいる。市民たちが今日《美しい新しい生活の建設者たち》から手に入れているものを、かつては豚にも与えないように人々は気をつけていたものだ。

かなりの長い間にわたって状況を救ったのは、《ソヴェトの慎ましい魚》にしんであった。しかし、すでに

自由経済の枠をいくらか広げること」を約束する。《立派な昔の貴族》のように、彼は、党独裁の弾圧の中で、あとでよりいっそう労働者の首を締め上げるために、《若干の恩恵》を用意する。それは、「確かに、人々は拘束なしですますことはできない。なぜなら、国は疲弊し、怖るべき貧窮の中にあるからである」という告白によって、よくうかがわれる。

貧乏人が最後のシャツまで取り上げられることもありうることは明白である。

そんなふうなレーニンは、上には商業上の譲歩、下には税金という、建設の任務を理解していた。

《コミュニケーション》の恩恵

「同志たちよ！われわれは、新しい美しい生活を建設する」。共産主義者たちは、そう語り、そう書いてきた。「われわれは、暴力の世界を破壊する。われわれは、新しい、社会主義的な、非常に美しい社会を建設する」。彼らは民衆にそう調子よくいつてきた。

現実はどうなるのか見ていこう。

すべての最良の家、すべての最良のアパートは、共産主義者機関の、事務所かその下部機構に徴発されている。したがって、官僚のみが、快適に、安楽に、広々と住まっている。住みうる住居の数は減少した。労働者たちは、彼らがいたとおどまっている。彼らは、そこで、今ではかつてよりも悪い条件の中で、極端に詰め

それ自身が不足し始めている。

ソヴェトの商店は、経営者たちがそこであらゆる種類の安物を売りさばかせた、奴隷である労働者たちはそこで何一ついうことのできなかつた悲しい思い出のする、工場の売店よりも悪い。

家族の生活を破壊するために、われわれの統治者たちは、集団食堂を作りだした。

その結果は何であろうか？

食事は、そこではますます我慢のできないものとなった。品物は、市民たちに届く前にあらゆるやり方で盗まれ、市民たちは残り物しか受け取らなかった。子供の栄養状態はややよくなったが、まだきわめて不十分であった。特に、牛乳が不足していた。自分たちのソフホーズのために、共産主義者たちは、農民大衆から一切の乳牛を徴発した。それに、それらの家畜の半ばは、目的地に着く前に死んだ。生きのびた乳牛は、まず統治者たちのところにゆき、ついで官僚たちのところに渡った。それらの残りのみが、子供たちのところに届いた。

しかし、最も苦勞したのは、衣服と履物であった。人は、以前に着ていた衣類を着るか、交換した。ほとんど何一つ配給されなかった(たとえば、組合の一つは現在ボタンを配給している。一人当たり一つ半のボタンである。冗談も甚だしいではないか)。履物についていえば、それは探しだすことができない。

共産主義の天国への道は美しい。しかし、靴の底なし

に人はそこを歩みうるであろうか？ だが、すべての必需品が消え失せてゆくたくさんの割れ目が存在する。《協同組合》と称するものの周辺の人々と統治者たちが、すべてを持っている。彼らには、自分たちの食堂と特別食糧割当がある。彼らはまた、人民委員たちのご好意によって物資を分配する、《引換券事務所》を意のままに扱っていた。

人は結局、この《コミュニン》が生産的な労働を崩壊させ完全に破壊したことを、理解した。その時、すべての働く意欲、労働への関心は消滅した。靴作り、洋服屋、鉛管工、等々は、すべてを放棄し、四散した。彼らは、守衛、郵便配達人、等々として働いている。そうしたもの、ボリシエヴィキたちが建設を企てた天国である。

元のもののかわりに、専断の、厚顔無恥の、《友情のあかし》の、情実の、盗奪の、思惑の新しい制度、人々がパン一かけらごとに、ボタン一つごとに、当局に物乞いしなければならぬ怖るべき制度、そこでは人々が自分自身に属していない、自分自身を自由にするこのできない制度、隷属と墮落の制度が、樹立された。

〔第一四号、一九二一年三月十六日〕

自称「社会主義」

十月革命をなしたげながら、水兵、赤軍兵士、労働

者、農民は、ソヴェトの権力のために、労働者の共和国の建設のために、彼らの血を流した。

共産党は、大衆の渴望を肝に銘じて忘れなかった。その旗に、労働者たちを熱狂させる誘惑的なスローガンを書きつらねて、党は、大衆を闘争へと引き立て、ボリシエヴィキのみが建設しうる、社会主義の美しい王国へと導くことを、彼らに約束した。

もちろん、限らない喜びが、労働者と農民の心をとらえた。「遂に、地主と資本家のくびきの下での隷属は、伝説の領域に入ることとなる」と、彼らは考えた。田園での、工場での、作業場での自由な労働の時が来たように見えた。権力は、労働者たちの手中に移ってゆくように見えた。

巧みな宣伝によって、勤労大衆の若者たちは党の戦列に惹き寄せられ、そこで彼らは厳格な規律に従わされた。

それから、力を自覚した共産主義者たちは、次第に、まず他の傾向の社会主義者たちを権力から排除した。その後、彼らは、労働者と農民の名で統治することをつづけながら、労働者と農民自身を、国家の数多くのポストから追いだした。

共産主義者たちは、そうして、彼らが奪い取った権力を、個人的権力のあらゆる専断を伴う人民委員たちの保護にかえた。あらゆる理性に反して、労働者たちの意志とは反対に、その時、彼らは、自由な労働にもとづく社

会主義を建設するかわりに、奴隷を伴った、国家社会主義を執拗に建設し始めた。

産業が完全に破壊されたので、《労働者管理》に反して、ボリシエヴィキたちは《工場と製造所の国有化》を実施した。資本主義の奴隷から、労働者は、国家企業の奴隷に変わった。間もなく、それではもはや不十分となる。テラー・システムの実施が計画された。

すべての耕作者大衆は、民衆の敵と宣せられ、《富農》と同一視された。ひどくがむしやらの共産主義者たちは、そうして、農民を破壊し、ソヴェト的搾取制、つまり新しい農業搾取者、国家の所有制を樹立し始めた。それらすべてが、農民が、彼らが望んだ自由な土地での自由な労働のかわりに、ボリシエヴィキ社会主義から手に入れたものである。

ほとんど完全に徴発された、パンと家畜のかわりに、人々は、チェーカーの手入れと一斉射撃とを手に入れた。労働者の国家にとっての見事な交換の方式とは、弾丸と銃剣をパンに代えることであった！

市民の生活は、当局の規則にもとづいて、死ぬほど単調に月並みになった。個人の自由な労働と自由な進歩によって活気づけられた生活のかわりに、かつてない、信じがたい隷属が生まれた。あらゆる独立した思考、犯罪的な統治者たちへのあらゆる正当な批判は、投獄によって、しばしば死刑によって罰せられる、犯罪となった。

死刑、この人類の不名誉は、《社会主義の祖国》の中

で盛りを迎えた。

そうしたものが、共産党がわれわれを導いた、社会主義の美しい王国である。

われわれは、無謬の当局とその人民委員たちが命ずることに従順に賛成する、官僚たちのソヴェトを伴った、国家社会主義を獲得した。

《働かぬものは食うべからず》というスローガンは、《ソヴェトの》美しい制度の下では、《すべてを人民委員たちのために！》と変えられた。そして、労働者、農民、知的労働者についていえば、どうであろう！ 彼らは、牢獄の環境の中でしか自分たちの仕事を成就してはならなかった。

それらは耐えがたいものとなった。革命的クロンシュタットは、初めて、鎖を断ち切り、牢獄の格子を破壊した。クロンシュタットは、生産者自身が、自らの勤労の産物の主人となり、望むようにそれを処理しうる、真の労働者ソヴェト共和国のために闘っている。

ペトリチェンコの証言⁽⁹⁾

私は、左翼の革命的社會主義者組織とイギリスの共産主義者たちの間で交された、往復書簡を読んだ。この往復書簡の中では、一九二一年のクロンシュタットの反乱がともに問題となっている。

クロンシュタット反乱の議長として、私は、イギリス共産党政治局に対し、この出来事をはっきりさせることが、私の精神的義務である、と考える。私は、あなた方がモスクワから情報をえていることを知っている。私はまた、その情報が一方的で偏見によるものであることを知っている。もう一方の側からの発言を同様に聞くことは、あなた方にとって悪いことではあるまい。

あなた方は、あなた方自身、一九二一年のクロンシュタットの反乱は外からそのかされたものではないことを認めた。いいかえればそれは、勤労大衆の、水兵、赤軍兵士、労働者、農民の忍耐が極限に達した、ことを意味する。

共産党独裁に対する、あるいはむしろその官僚主義に対する民衆の怒りが、反乱の形をとったのである。そうして、貴重な流血が始まった。階級ないし階層の違いが

問題なのではなかった。防塞の両側には、労働者たちが立っていた。両者の違いはただ、クロンシュタットの人が意識的に拘束なく行動していたのに対し、侵略者たちは、共産党指導者たちにだまされ、力によって操られていたことである。私は、あなた方にそれ以上のことをいいたい。つまり、クロンシュタットの人々は、武器を取り、血を流すことへの、いかなる好みも持っていなかった、ということをしる！

よろしい！ では、クロンシュタットの人々が、《労働者と農民の政府》と名乗る、共産党の独裁者たちと、大砲によって語り合うことを強いられたのは、何のためか。

クロンシュタットの兵士たちは、問題の政府の創立に積極的に参加した。彼らはそれを、反革命の攻撃から守った。彼らは、世界革命の中心、ペトログラードの城門を防御したのみならず、コルニロフに始まりユーデニツキ將軍やネフリュードフ將軍にいたる、白衛軍に対する数多の戦線に、分遣隊を組織して送りさえもしたのである。したがって、その同じクロンシュタットの人々が、一挙に革命の敵となつたらしい。《労働者と農民》の政府は、彼らを、対ソ協商の手先、フランスのスパイ、ブルジョアジーを支えるもの、革命的社會主義者、メンシェヴィキ、等々と紹介した。

武装した反革命の將軍たちの側からのあらゆる危険が消滅したまさにその時に、クロンシュタットの人々がに

わかに危険な敵となったことは驚くべきことである。それは、国の再建を始め、十月の獲得物の成果をつみとるべきまさにその時であり（もはや約束するだけでは十分ではなく、さらに約束を履行しなければならなかったから）、実際に品物を見せ、政治的な所持品を広げて見せなければならぬ時であり、内乱の時期には誰一人あえて夢みることもなかった革命の獲得物の決算をしなければならぬ時であった。まさにその時に、クロンシュタットの人々は敵として現われたのか？ では、クロンシュタットは、革命に対してどんな罪を犯したのか？

内乱の諸戦線の整理ののち、ペトログラードの労働者たちは、彼らの経済的状况を考える時、戦時体制から平和体制に移す時が来たことを、この市のソヴェトに考慮させることができると信じた。

ペトログラードのソヴェトは、労働者たちの無害でもあり必要欠くべからざるものでもあるこの要求を、反革命的である、と見なした。市ソヴェトは、この要求に耳を貸そうとはしなかった。それは、スパイや対ソ協商の手先呼ばわりしつつ、労働者たちの間で搜索や逮捕を開始した。官僚たちは、内乱の間に腐敗していたのである。その時期には、誰もあえて抵抗しなかった。しかし、彼らは、状況が変わったことを理解しなかった。労働者たちの回答は、ストライキであった。ペトログラード・ソヴェトの激怒は、その時、猛獣のそれとなった。そのオブリチニーク⁽¹⁰⁾に援けられて、市ソヴェトは、飢え

と疲れ果てた労働者たちを鉄の囲いの中に監禁し、あらゆる手段で彼らに働くことを強制した。軍組織（赤軍兵士と水兵）は、自分たちの労働者たちへの共感にもかかわらず、彼らを守るためにあえて立ち上がらなかった。なぜなら統治者たちは、ソヴェト政府にあえて敵対するすべてのものは、クロンシュタットによって攻撃されるであろう、と警告していたからである。しかし、今度は、《労働者と農民》の政府は、首尾よくクロンシュタットをあててはできなかったのである。その地理的な位置、ペトログラードとの近さのおかげで、クロンシュタットは、いくらかは遅れてとはいえ、ペトログラードでの真の事態を直ちに理解したのであった。

したがって、イギリスの同志たちよ、あなた方が、クロンシュタットの反乱は誰からもそのかされたのではない、といったのはもつともである。

私はさらに、ロシアと外国の反革命組織のクロンシュタットの人々への支持は、何の中で表明されたのか知りたいと思う。私は、クロンシュタットの反乱は、何らかの政治組織の意志によって始められたものではない、ともう一度くり返す。私は、そうしたものはクロンシュタットには存在しなかった、と考えている。反乱は、市の民衆と守備隊との、大衆自身の意志によって爆発した。われわれはそれを、可決された決議の中に、臨時革命委員会の構成のうちに見る。そこに、何らかの反ソヴェト的な政党の意志の優越的な表明を見ることはできない。

に起こるであろうことについて、仮定を試みることはできなかった。なぜなら、事件は、われわれが考えたものとはまったく別のものでもありえたからである。しかし、クロンシュタットの人々は、彼らの手中にある、発意を手放す意向は持たなかった。

共産主義者たちは、彼らの新聞の中で、フィンランドに駐在するロシア赤十字から食糧と医薬品の提供を受けた、とわれわれを非難した。われわれは、その種の提供の中に何一つ罪悪を見るものではない、といわねばならない。われわれはそれについて、臨時革命委員会のみならず、代表者会議の同意もえていたのである。われわれはあの組織を、われわれに無害な下心のない援助を提供する、純粹に博愛的なものとなしなしていた。われわれが（赤十字の）代表団をクロンシュタットに入れさせると決定した時、われわれは彼らを目隠しして参謀部まで連れていったのである。

最初の打合わせの席で、われわれは彼らに、われわれは博愛的な組織から出たものとして彼らの援助を感謝して受け入れる、しかしそのためにわれわれは彼らに何一つ約束するものではないと考えている、と述べた。われわれは、彼らの組織がわれわれに送ると提案した、特に婦人と子供に向けられた、食糧の規則的な分配を監視するためのクロンシュタット常駐の代表を残すという、彼らの要求に応じた。クロンシュタットに残ったのは、ヴァイルケン大尉である。彼は、許可されないことはいささ

い。

クロンシュタットの人々の意見では、起こり、なされたすべては、当時の情勢に強いられたものであった。反乱者たちは、誰をもあてにしなかった。臨時革命委員会においても、代表者会議においても、集会でも、その他の場所でも、そのことは決して問題にならなかった。臨時革命委員会は、そうした可能性があったにもかかわらず、その方向で何一つ決して企てたことがなかった。委員会は厳格に民衆の意志を達成しようとした。それはよいことであつたらうか、悪いことであつたらうか？ 私はそれを判断することはできないが、現実には、大衆が委員会を指導したのであって、委員会が大衆を、ではなかった。

われわれの間には、地下三アルシンの見抜く、有益なこと一切を手にするために企てなければならぬすべてを知る、著名な政治活動家たちはいなかった。クロンシュタットの人々は、計画も綱領もなしに、諸決議の範囲内で、状況にしたがって、ただ模索しながら行動したのである。全世界から切り離されて、われわれは、ソヴェト・ロシアにおいても外国においても、クロンシュタットの外で起きていることを知らなかった。何人かの人々が、習慣によってなされるように、われわれの反乱についていろいろな推測を試みることは可能であった。しかし、われわれの場合には、それは無駄なことであった。われわれは、出来事が別な局面をとりうる場合

かもしれないように常時警備されていたアパートに住んでいた。このヴァイルケンがどんな危険を示したであろう。彼はただ、クロンシュタットの守備隊と一般住民の精神状態を見ることができただけである。

国際ブルジョアジーの援助があつたというのは、そのことであろうか？ それとも、ヴィクトル・チエールノフが反乱クロンシュタットに挨拶を送ってきた事実をいうのであろうか？ それは、ロシアならびに国際的な反革命の支持であつたらうか？ 人々は、クロンシュタットの人々が反ソヴェト的な政党の保護を求めたと、本当に信じうるのであろうか？ 事実、反乱者たちは、右翼が彼らの反乱に関する計画を立てていると知った時、彼らは、クロンシュタットの『イズヴェスチヤ』紙三月六日号の論説が証明しているように、それを同志たちにあらかじめ知らせることをためらわなかったのである。

1 エマ・ゴールドマン「わが生を生きて」（一九三四年）の抜萃。

2 トロツキーは、家族とともに、一九一七年三月二十七日に、ロシアに向けて、ニューヨークで船に乗った。

3 エマ・ゴールドマン、前掲書よりの抜萃。

4 労働者出身の、当時、ボリシエヴィキ党ペトログラード委員会の書記であつたこのゾーリンは、フランス駐在ソ連邦大使、現在のヴァレリアン・ゾーリンとはいかなる関係も

ない。彼は、チェカーの火葬場で死んだ。

5 選抜された将校生徒。蒙古兵たちとともに、クロンシュタットの反乱を鎮圧するに活用された。

6 アレクサンドル・ベルクマンについては、I巻三二四ページを見よ。

7 一七四ページを見よ。

8 一九〇一ページを見よ。

9 Mikhail Touthachevsky (1893—1937) ツァーの元将校、のちのソヴェットの元帥。最後は、ヒトラーによって作られた証拠品にもついで、スターリンの命令で処刑される。

10 NEP、《戦時共産主義》の失敗ののち、レーニンによって決定された新経済政策。それは、ある範囲で、私的な主導権を復活させることを狙っていた。

11 第十回党大会で断罪された、クリアブニコフとアレクサンドラ・コロンタイによって指導された、ボリシェヴィキ党の一傾向。

12 Gregori Petrovich Maximoff (1893—1950) タロボトキンを読んで、ロシアでアナキストとなる。新聞「労働の声」に協力する。ロシア革命の間、アナルコ・サンジカリズムの潮流のスポークスマン。彼は、一九二二年、故国を離れねばならなくなり、ベルリンにゆき、そこで国際労働者協会の中で活動し、ついでパリにいった。さらに一九二五年にアメリカ合衆国に亡命し、そこでロシア語のアナキスト新聞を刊行し、アナキストの観点からのロシア革命についての最良の本の一つ、「ロシアにおける恐怖の二十年」(一九四〇年)を、英語で発表した。また、バクーニンの著作の体系的なアンソロジーの、英語による編者でもあった。

13 する。——ボリシェヴィキの神話(一九〇ページを見よ)は、ベルクマンによって一九二二年に英語で発表された小冊子の題名となった。

この条項の真の意味を理解するためには、クロンシュタットを知っている必要がある。事実、この条項は、言論と出版の自由を限ろうとしているように見える。というのもそれは、極左的な流れにしかそれを要求していないからである。決議は、運動の真の性格を考え違いないからである。可能性をあらかじめ取り除いておくためにのみ、そうしたものである。

革命の初め以来、あまりに狂信的な将校たちの血が流された初期の日々以後直ちに、クロンシュタットは、最も広汎な自由を実現した。市民たちは、彼らの信条が何であろうと、何一つ気兼ねすることはなかった。僅かに何人かの頑強なツァー派のみが、牢獄にとどめられていた。しかし、自然発生的な怒りの爆発が過ぎるや否や、理性が生存本能に打ち勝ち始めるや否や、人々は、すべての囚人の釈放の問題を、諸集会で提起した。クロンシュタットの人々は、それほど牢獄を憎んでいなかった。彼らは、すべての囚人に、町の城壁内でのみ、自由を与えることを決めた。というのも、クロンシュタットでは、反動の策謀は全く成功しなかったが、水兵たちは、他の地区に反革命者たちを送り込む権利があるとは思わなかったからである。ケレンスキーの行動が新しい怒りの波を惹き起こし、計画は放棄された。しかし、不機嫌の激発はそれが最後であった。それ以後、クロンシュタットは、ただの一度も思想への迫害を経験していない。あらゆる主張は、そこでは自由に流布された。アンクル広場の演壇には、誰でも立つことができた。

14 (ヴォーリン注)

これは、市の周りでの武装した分遣隊とかかわりがある。彼らの公式の目的は、不法な商業を除去し、食糧その他の産物を没収することであった。その《通行止め》の無責任さと勝手さは、国中に知れ渡ることとなった。皮肉な事実——政府は、クロンシュタットへの攻撃の直前、この分遣隊を廃止した。そうして、ベトログラードのプロレタリアートをだまし、籠絡しようとしたのである。(ヴォーリン注)

15 この新聞は、一九二二年三月の反乱のずっと以前から存在していた。この新聞の反乱期間中の号の完全な翻訳が、ベリバスト社から刊行されている。『クロンシュタットのコミュニティ』(一九六九年)

16 トレーボフ、皇帝ニコライ二世の最も残忍な将軍たちの一人、一九〇五年の動乱の際の、部隊への彼の命令、《弾丸を惜しむな!》によって有名。(ヴォーリン注)

17 Alexis Koltchak 提督 (1874—1920) 革命ロシアとシベリアで戦った(一九一八—一九一九年)。一九二〇年に銃殺された。——Nicolas Yudenitch (1862—1933) やはり一九一八—一九一九年に白軍を、彼の場合はコサック騎兵

18 軍団を指揮し、最後にはボリシェヴィキたちと闘うことになった。デニキンについてはI巻三二四ページを見よ。

19 アメリカ人 Frederic Winslow Taylor (1856—1915) の名にもとづく。《時間の浪費》を避けるために労働の時間測定を行ないつつ、労働の《いっそう合理的な》組織化を樹立しようとする、労働者の超搾取方式。

20 イダ・メッツ『クロンシュタットのコミュニティ』(スバルタクス版、一九三八年)、一九四八年新版(クロンシュタット叛乱)、蒼野和人他訳、鹿野社、に引用されたもの。

21 一九二六年一月の『ズナーミヤ・ボルビー』に発表された。オブリチニク、同時に最高政治警察でもあった、イワン雷帝の親衛隊。それが存在した七年間(一五六五—一五七二年)に、そのメンバーたちは残虐行為によって注目された。(イダ・メッツ注)

22 アルシンは、ロシアの長さの尺度。(イダ・メッツ注)

23 ヴィルケン、ロシア海軍の元将校らしい。(イダ・メッツ注)

Victor Tchernov (1876—1982) 社会革命党の指導者の一人、一九一七年二月革命後の間、一九二〇年にロシアから亡命しなければならなかった。